



增補太平記

水蔭稿
紅葉補



特別
文庫14
A166





53-1711

高野たかのをさして主従しゅじゆが

人目ひとめを包かひ 山伏やまぶしの仮姿かりすがた

熊野くまのをめぐりて兄弟けいだいが

侍さむらい連れん 野伏のぶしの本心ほんしん

上うへ 大坂おほさか 片崗かたがた ハハ

石坂いしざか 五直半ごぢくはん 油用あぶらもち 魚山うまやま 舟ふね 江見えみ 舟腰ふねこし

増補全記

ほ たいへい せ

北道

本舞臺なる武蔵草薙。上牛土木戸、山おろく、遠寄を冠せ。
暮明く、所へ片岡八良好のありて出で、北道よる所よて

片

「何れればさかくるぞ、世は浅きと成りはしてぞ
忠臣無きと思ひたる竹原方さへ心置れず。高野へ出る
街道の、間所をさへはさるゝ亦、北條方へ心を通ぐ
担悪無神の刃向ひはし。宮より、中野、歩無多し思はれど
あゆみ見ゆる大木戸は、玉置道に司が持場
と聴く。それば、先道、北道、上か、は、敵か



様やあつ

エヤあッ

六「事」急す

はやく

五「サア」

片「聞」

ス「サア」

片「聞」

片「聞」

片「聞」

片「聞」

片「聞」

片「聞」



ゆき〜

〜

〜

〜

〜

〜

〜

〜

〜

〜

Handwritten notes and fragments, including the characters '片' (fragment) and '聞' (hear/listen) repeated multiple times, along with various other characters and symbols.

平水書あり。ふたつより開中す。

トばた〜 あり、劇を立廻りあり、本居の牛は入る。此大陸毎き〜あり

あし せが は びん ぶき かげ いは
ついで 昔の 瀬川の水は びん ぶき かげ いは
砕き 散る 瀬川の水は びん ぶき かげ いは
亦 思ふ まし。

一歩い 浅草 昔 希 切 せ 落す

本無 山を見たり 書割。 上 年 倉。 岩 組
よる 松の 釣 杖。 上 年 子 丸。 月 出。 都 て 昔 野 願 川

二品親王

岩の傍の所へ本場中、上手の岩を掛す。赤松律節則祐、村上高望、義孝、下より所よりす。碓氷の相方ありて。

親王「やや、羊我光い子、八良は見えざるか。碓氷」

村「しよだ、歸り着けりませぬ。補はんより。」

赤「道に迷ひておく所か。但しは、庄司子、碓氷中より。」

親王「いづれに致せ。心あなぬ事ぢや、あア。」

水音をわづせる。皆々思入あぞ。

大「さぞは、親のあぢりは、何と申す所あるぞ。」

赤「最前、推夫子尋ね候ひし。すべては、あぢりな琵琶の里と申し、あれある谷川を、芦野瀬川と申すなり。」

大「芦野瀬川と申すとか。」

ト思入ありて

大「班比班の女の日。昔よかへて物すも、あしの瀬川の瀬々

の水立の頼三が、ちよはせぢや、あア

顔見をせるをきかケ、本釣鐘、宮は月を見あげる。え

は、心と伏す。相方の相方ありて。

大「我、南都の熊若寺あり。九死の中よ一生を得。それより

紀路の浮旅、逆賊、討ち入がため、熊野詣ての心伏

と、人目を包みて入止し。比、津川は昔より、勤王無二

の輩が、住家ばかりと思ひし。肝が、

赤「不忠不義の小人原の利を、見入るる新南無。」

村「口」の入り目されと云ふ。頼子成す人の子く。
大「黒本の鎧を中より」十里足らずの道のりも
赤「今日を合せて五日の旅路」
村「松ヶ根枕」の枕
大「志め」り勝ち
三「門」出でて来ア、
大「山又山」をかきわけて峰々々々道なき道のりか、其所
村「所」その小戦争。定めし其の草臥る人、八良が歸
るなり。あがきく時所より休息せよ。
赤「思れ多き其お詞。臣等は左程に存せぬと。」
村「我君様」よはなせりしと。

別れ

君は野村に休息ありて一せう存引す

赤「おしたや」存引す
大「イヤ」人帝の事を思へば。断程の事は平だく
赤「未だ」んぞれ我をなほし。まじろそふんい
岩子められ眠る。亦獨吟あり

梅離れし鳥の夢は松葉おたきよびて

三 五山の田長
の一声休
多な寝
りてぬ
赤「何」も八良が
ト「人」を起す
赤「何」も八良が
海女
や
いづ
つ
お
見
山

村「歸りしや」と云

起きあがりて見廻せど八良の見えぬ体。

大「あんと申す玉置道在司が二心ある、いさぐで苦戦致せ

しとのや。定めて癒方致さるん。瘡はおはあか、

痛手はあまか

とせゆるあましく氣のつく大ドラ。あま八良を消す

あは

赤「我君。あんと

大「あまあまは、あまであまか

赤「あまを皆置見

打「あまれす」云か

大「今八良が歸りたる様はおぼえて目見たるが。あまや

非命の最期でござん

ト「あまの思入れ。おは流霧を打止む。あまをキツとあり。

林「さな野女なりあかめ。甲の銀さる。

赤「あま直に司がけ航へ

打「あまよせ来るとおぼえたり

大「あま何程の本事かあま

赤「只ひとりあま

大「あまあま

赤 一 吉原枕のほろい逢中にて
 村 一 お見かけはあまざりか
 六 一 其の良とおぼせたるは、片岡屋の事ではなから
 七 一 片岡屋の事では、其の二人の宮の奉行衛士づねあぐみ
 六 一 ぼとく、当惑致せし
 七 一 宮の世代は名を承りて
 六 一 けれを先道守徳の下に
 七 一 いづれへ直寄りをなれや
 赤 一 赤、市田道とせられし
 六 一 下さなはいよ、討死
 赤 一 其と雲がたぐを

六
 工

赤 一 赤、市田道とせられし
 六 一 下さなはいよ、討死
 赤 一 其と雲がたぐを
 六 一 ぼとく、当惑致せし
 七 一 宮の世代は名を承りて
 六 一 けれを先道守徳の下に
 七 一 いづれへ直寄りをなれや
 赤 一 赤、市田道とせられし
 六 一 下さなはいよ、討死
 赤 一 其と雲がたぐを







